

# 平安京左京四条一坊十三町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇〇六―一〇

平安京左京四条一坊十三町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所







# 平安京左京四條一坊十三町跡

2006 年

財団法人 京都市埋藏文化財研究所



# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびマンション建設に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

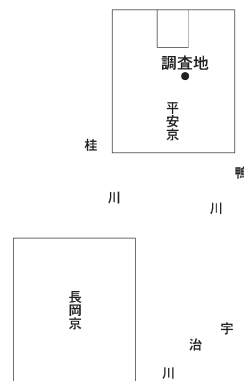
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 10 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- |          |  |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名  | 平安京左京四条一坊十三町跡                            |
| 2 調査所在地  | 京都市中京区壬生坊城町 5 - 15 他                     |
| 3 委 託 者  | 富士高興産株式会社 代表取締役 高井保治                     |
| 4 調査期間   | 2006 年 7 月 3 日～ 2006 年 8 月 29 日          |
| 5 調査面積   | 400 m <sup>2</sup>                       |
| 6 調査担当者  | 伊藤 潔・近藤章子                                |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）          |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度                           |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。        |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。        |
| 12 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。                     |
| 13 遺物番号  | 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。                     |
| 14 掲載写真  | 村井伸也・幸明綾子                                |
| 15 遺物復元  | 村上 勉・出水みゆき                               |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾                                     |
| 17 本書作成  | 伊藤 潔・近藤章子                                |
| 18 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・櫻井みどり・山口 眞                     |



(調査地点図)

0 2 4km



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	1
3. 遺 構	3
(1) 第1面の遺構	4
(2) 第2面の遺構	6
(3) 第3-1・3-2面の遺構	6
4. 遺 物	9
(1) 土器類	9
(2) 瓦類	14
(3) 木製品	20
5. ま と め	21

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1 第2面全景（北から）
		2 第3-2面全景（北から）
図版2	遺構	1 第1面全景（北から）
		2 第3-2面中島（北西から）
		3 SE89（北から）
		4 SE107（西から）
		5 西壁 SG158 断面
		6 東壁中島南側断面
		7 草鞋出土状況
		8 軒丸瓦出土状況
図版3	遺物	土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器
図版4	遺物	緑釉陶器・輸入陶磁器
図版5	遺物	SE89 出土鎌倉時代の軒瓦
図版6	遺物	平安時代の軒丸瓦
図版7	遺物	平安時代の軒平瓦
図版8	遺物	平安時代の軒平瓦・鬼瓦・鴟尾

# 挿 図 目 次

図1	調査前全景（北から）	1
図2	作業風景	1
図3	四行八門および調査区配置図（1：1,500）	2
図4	調査位置図および周辺の調査（1：5,000）	2
図5	第1・2面遺構平面図（1：250）	4
図6	SE89・107・105・155実測図（1：50）	5
図7	西壁断面図（1：80）	6
図8	第3-1面遺構平面図（1：150）	7
図9	第3-2面遺構実測図（1：150）	8
図10	SE89出土土器実測図（1：4）	9
図11	SE107出土土器実測図（1：4）	10
図12	SG158出土土器実測図（1：4）	11
図13	その他の遺構、整地層出土遺物実測図（1：4）	12
図14	SE89出土軒瓦拓影・実測図（1：4）	15
図15	平安時代の軒丸瓦・鬼瓦・鴟尾拓影・実測図（1：4）	17
図16	平安時代の軒平瓦拓影・実測図（1：4）	18
図17	木製品実測図・草鞋模式図（1：4）	20

# 表 目 次

表1	遺構概要表	3
表2	遺物概要表	9
表3	その他の遺構、整地層出土掲載遺物一覧表	13
表4	SG158検出種実等一覧表	21

# 平安京左京四条一坊十三町跡

## 1. 調査経過

京都市中京区壬生坊城町 15- 5 他で、2005 年 8 月 31 日に京都市文化財保護課が試掘調査を実施したところ、櫛笥小路東築地内溝や、時期は異なるものの柱穴・土壙が認められ、平安時代の遺構を良好な状態で検出した。そのため、京都市文化財保護課の指導により（財）京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け発掘調査を行うこととなった。調査は 2006 年 7 月 3 日から 8 月 29 日までの期間、実施した。

調査は櫛笥小路東側築地および路面の一部を推定し、敷地南半に南北 33 m、東西 11 ～ 13 m の調査区を設定し、現代層および旧耕作土層・近世層（GL-0.7 ～ 1.1 m）まで重機掘削し、中世面から調査を開始した。

## 2. 位置と環境

調査地は四条大宮から北西に延びる後院通に北面する、南北に長い敷地である。当該地は平安京の条坊では北側を錦小路、西側を櫛笥小路、南側を四条大路、東側を大宮大路に四方を画された左京四条一坊十三町の西部分にあたる。また、1 町内を区分する「四行八門制」では、十三町内の「西一行北四・五・六門」の三戸主分および、櫛笥小路に該当する。

文献資料からは、当十三町における平安時代前・中期の著名な邸宅の存在は認められない。しかし、平安時代後期になると、中納言藤原家成、権大納言藤原隆季の邸宅の存在した記述をみる<sup>1)</sup>ことができる。

鎌倉時代には、朱雀大路以西は都市的機能をほとんど果たさず、市街地の発達はほぼ大宮通以東に固まってきており、当該地は市街の最西端という場所に位置することになり、都市に隣接する農村地域として田畑に利用されていたとみられる。

室町時代になると大宮通を中心とする地域では、多くの寺院の建立、あるいは寺院によって差



図1 調査前全景（北から）



図2 作業風景

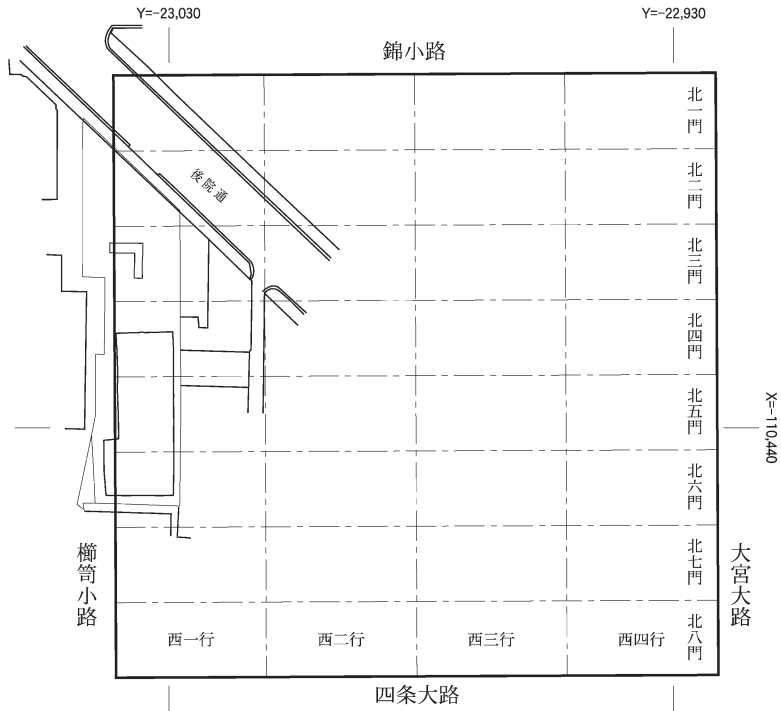


図3 四行八門および調査区配置図 (1 : 1,500)

配された土地が出現する。四条坊門大宮の安国寺、三条大宮の長福寺、六角大宮の本能寺などがある。

この状況は、江戸時代になっても大きく変わることはなかった。

当十三町における発掘調査例はなく、試掘調査、立会調査のみである。当調査地の東に 30 m の試掘調査、同敷地での立会調査では、平安時代中期から後期の池状堆積を検出している(図4-1)。また、十一町にあたるが、北西に約

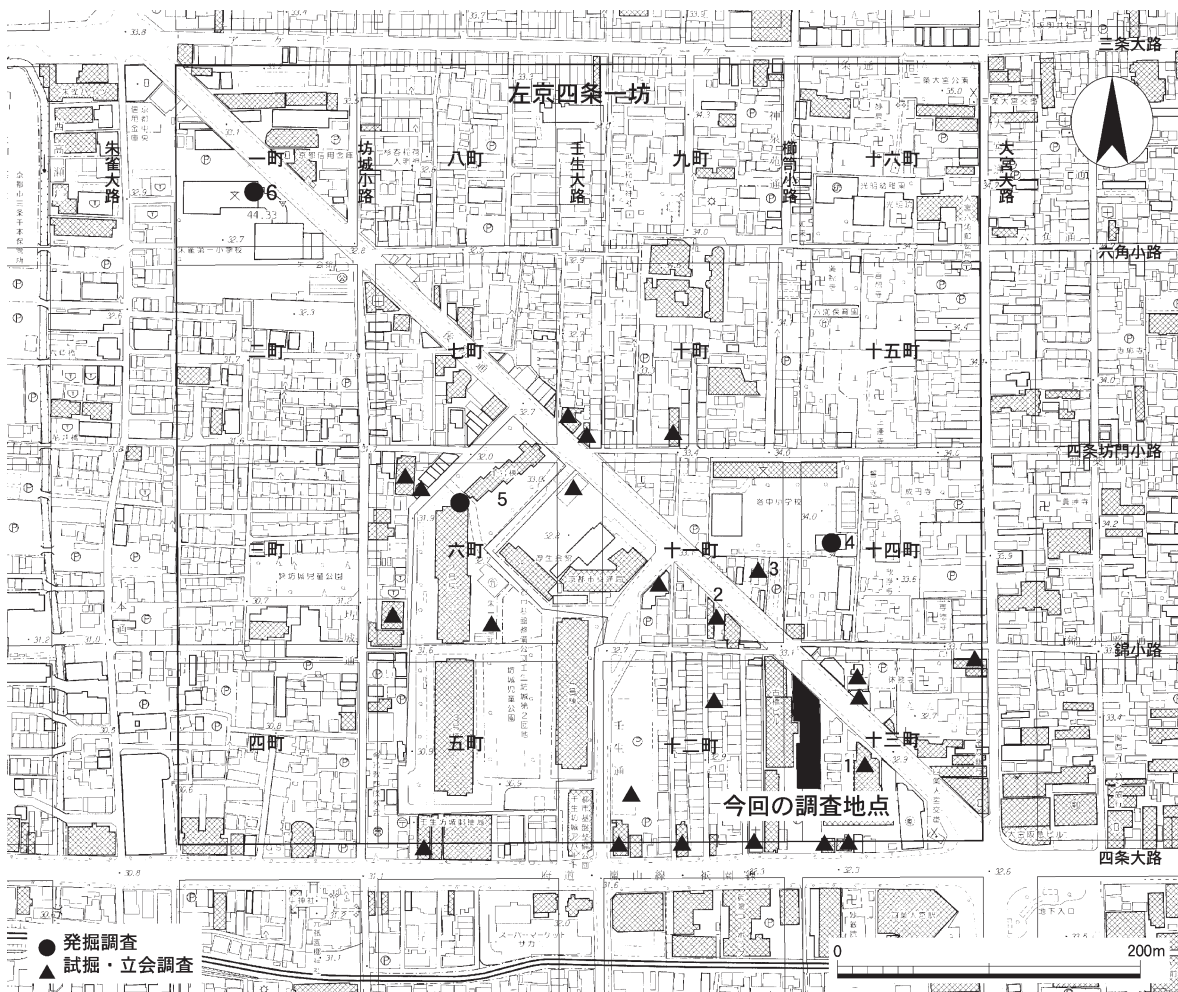


図4 調査位置図および周辺の調査 (1 : 5,000)

80 mでの立会調査では、平安時代中期の池状遺構が検出されている（図4-2）。北側の調査では、西から東へ下がる湿地状堆積の粘土層を検出している（図4-3）。

周辺の発掘調査例としては、1980年の乾小学校（現洛央小学校）（左京四条一坊十四町）の発掘調査があり、鎌倉時代の土壌と室町時代の井戸が検出されている（図4-4）。

1975年には市電壬生車庫跡地（左京四条一坊五・六・七町）の調査が行われている。五町では12世紀後半の掘立柱建物や鎌倉時代末期から室町時代後期の壬生大路と錦小路の交差点部分の側溝と考えられる遺構が検出されている。六町では平安時代から鎌倉時代の四条坊門小路の南北両側溝、平安時代の前期の井戸、中期末の井戸（SE7）、中期から後期の小規模な建物跡が検出されている。SE7からは「寛治五年五月十三日」（1091）の墨書銘をもつ須恵器鉢や、「秋野方」の墨書銘をもつこけし形の人形が出土した。七町では、平安時代末期から鎌倉時代前半の井戸群や平安時代前期の土壌群が検出されている（図4-5）。

朱雀第一小学校では3度の調査（左京四条一坊一町）が実施され、1974・1975年度の調査では平安時代の建物跡、池などを検出し、1987年の調査では木簡や檜扇などの木器を含む池、1992～1993年の調査では、9世紀前半の六角小路北側溝や9世紀中頃の洲浜を伴う池跡が検出されている。池からは「朱雀院」と記された題箋などが出土している（図4-6）。

### 3. 遺 構

調査地の基本層序は、盛土（0.6～0.9 m）、黒色泥砂（近世：0.1～0.2 m）、第1面：褐灰色＋黄褐色泥砂層（鎌倉期整地層：0.1 m）、第2面：灰黄褐色砂泥層（平安時代後期整地層：0.1 m）、第3-1・3-2面：黄褐色砂泥、灰色粗砂層の地山となる。

近世の遺構は土壌や土取穴などがあるが、非常に少ない。第1面では14世紀代の石組み井戸1基、溝、土壌、土取穴などを検出した。第2面では平安時代後期の木枠組井戸3基、土壌などを検出した。第3面では平安時代の池状遺構を検出した。池状遺構は9～10世紀と11世紀の2時期あり、当初の池を縮小して改修を行った様子が確認された。

#### （1）第1面の遺構（図5、図版2-1）

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
近 世	土壌など	
中 世	井戸（SE89）、溝（SD94・148）、土壌など	
平安時代後期	井戸（SE105・107・155）、池（SG158-新）	
平安時代前期～中期	池（SG158-旧）	

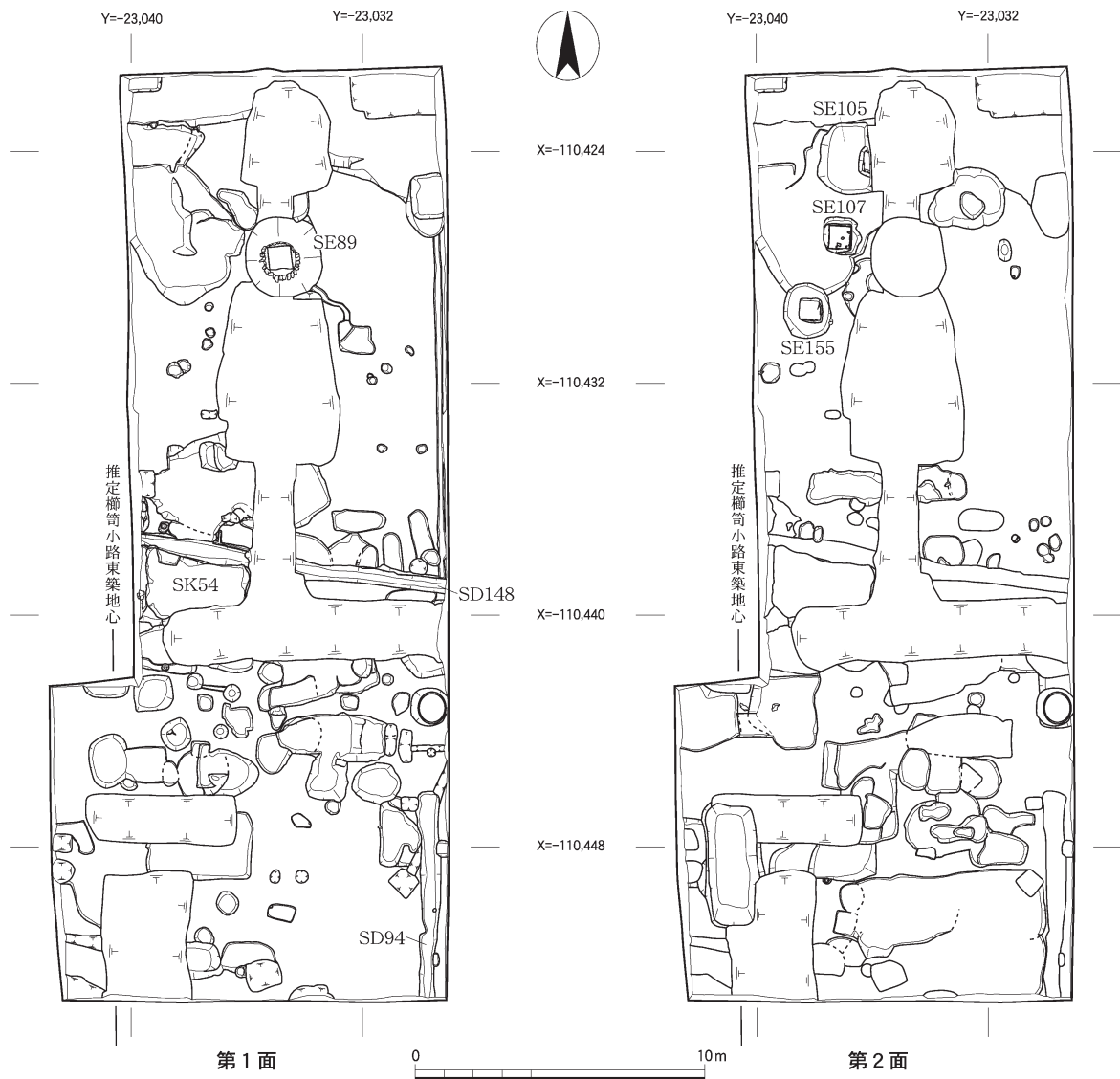


図5 第1・2面遺構平面図（1：250）

SE89（図6、図版2-3）掘形の直径約2.5m、深さ2.6mの石組井戸で、底面の標高は28.7mである。検出面から1.3mで石組みを検出した。石組内径は1.0mである。石組は5～6段残っており、その下に高さ0.5mほどの板枠が設置されている。井筒内の埋土は、褐灰色混礫泥土で、井戸に使用された0.3m大の石が大量に放り込まれていた。底面付近では、中世瓦や14世紀代の土師器が出土した。なお、埋土上層からは平安時代前期から鎌倉時代前半の遺物が出土している。

SD94 幅0.7m、深さ0.4mの南北方向の溝で、埋土は黒褐色泥土層である。14世紀代の土師器皿と共に輸入陶磁器が出土している。

SD148 幅0.4～0.7m、深さ0.35mの東西方向の溝で、埋土は黒色泥土層、14世紀の土師器が出土している。

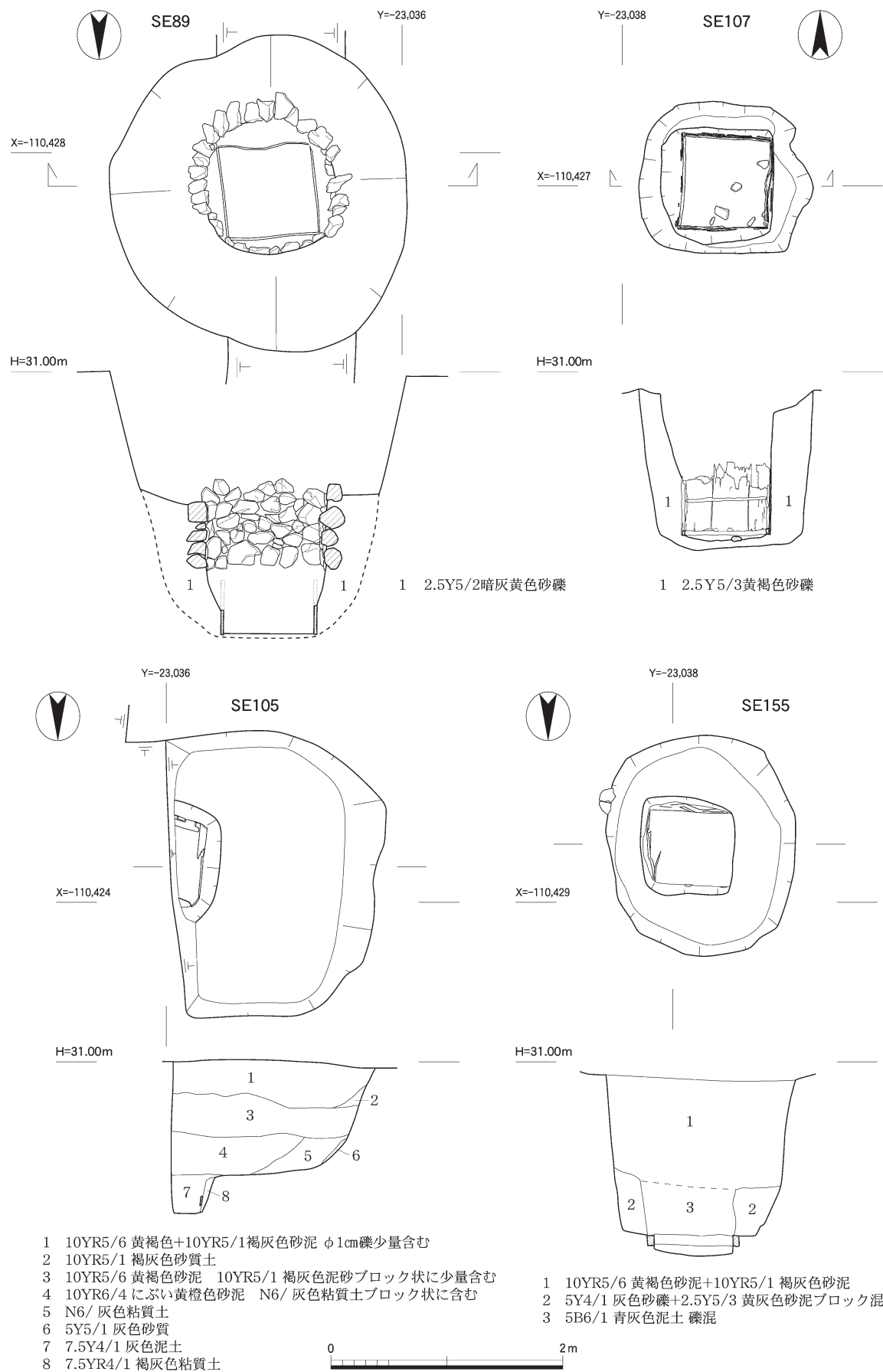


図6 SE89・107・105・155実測図 (1:50)

## (2) 第2面の遺構 (図5、図版1-1)

SE107 (図6、図版2-4) 1.5 mの円形の掘形で、深さは1.4 m。井筒は一辺0.8 mの方形、横棧縦板組の井戸で、底面の標高は28.5 mである。井筒内埋土の黒褐色泥土層より、12世紀前半～中頃の土師器皿が多量に出土した。

SE105 (図6) 一辺2.5 mの土壇状の遺構で、東半は攪乱を受けている。1 mほど掘り下げたところで、一辺0.9 m、深さ0.3 mの方形の木枠の一部を検出した。底面の標高は29.6 mである。井筒内埋土は灰色泥土で、遺物はほとんど出土していない。

SE155 (図6) 1.6～1.9 mの楕円形の掘形で、一辺0.8 mの方形横棧縦板組井戸で、底面の標高は29.3 mである。井戸部材は、下段の横棧を残して抜き取られている。井筒内の埋土は青灰色混礫泥土で、11世紀後半の土師器小片が少量出土した。

## (3) 第3-1・3-2面の遺構 (図8・9、図版1-2)

SG158-新 下層で検出されるSG158-旧の汀線から池部分を、褐色混礫砂泥層で埋め立てて陸部を形成する。洲浜などの施設は認められない。陸部の標高は31.16～31.28 m、池底部の標高は最深部で30.70 mある。東壁沿いの北半部は下層のSG158-旧の中島状の部分にあたり、池底部の標高は31.10 mと浅い。出土土器から、成立時期は11世紀前半代と考えられる。11世紀末期には埋まったと考えられる。

SG158-旧 SG158-新の整地層を掘り下げたところで検出した。洲浜などの施設は認められないが、調査区東端で地山を削って、中島状に造り出している。一部、平瓦を敷いた状態で検出された (図版2-2)。中島の南半部では、汀線から池部分は灰黄褐色粘土で整地されている (図版2-

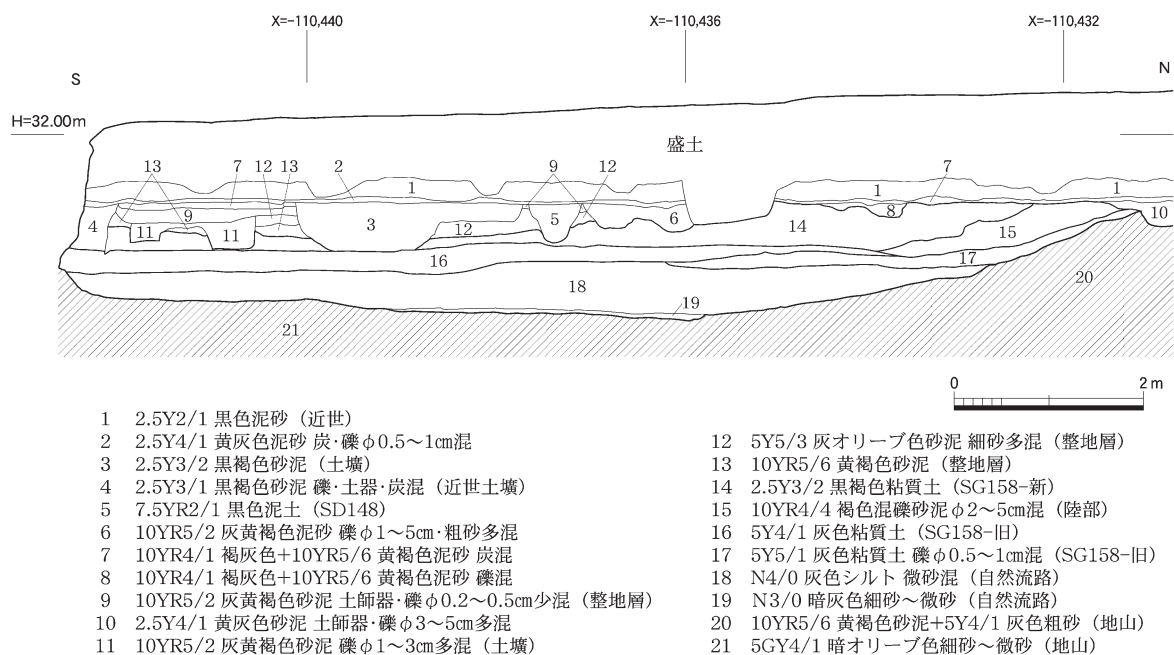


図7 西壁断面図 (1:80)



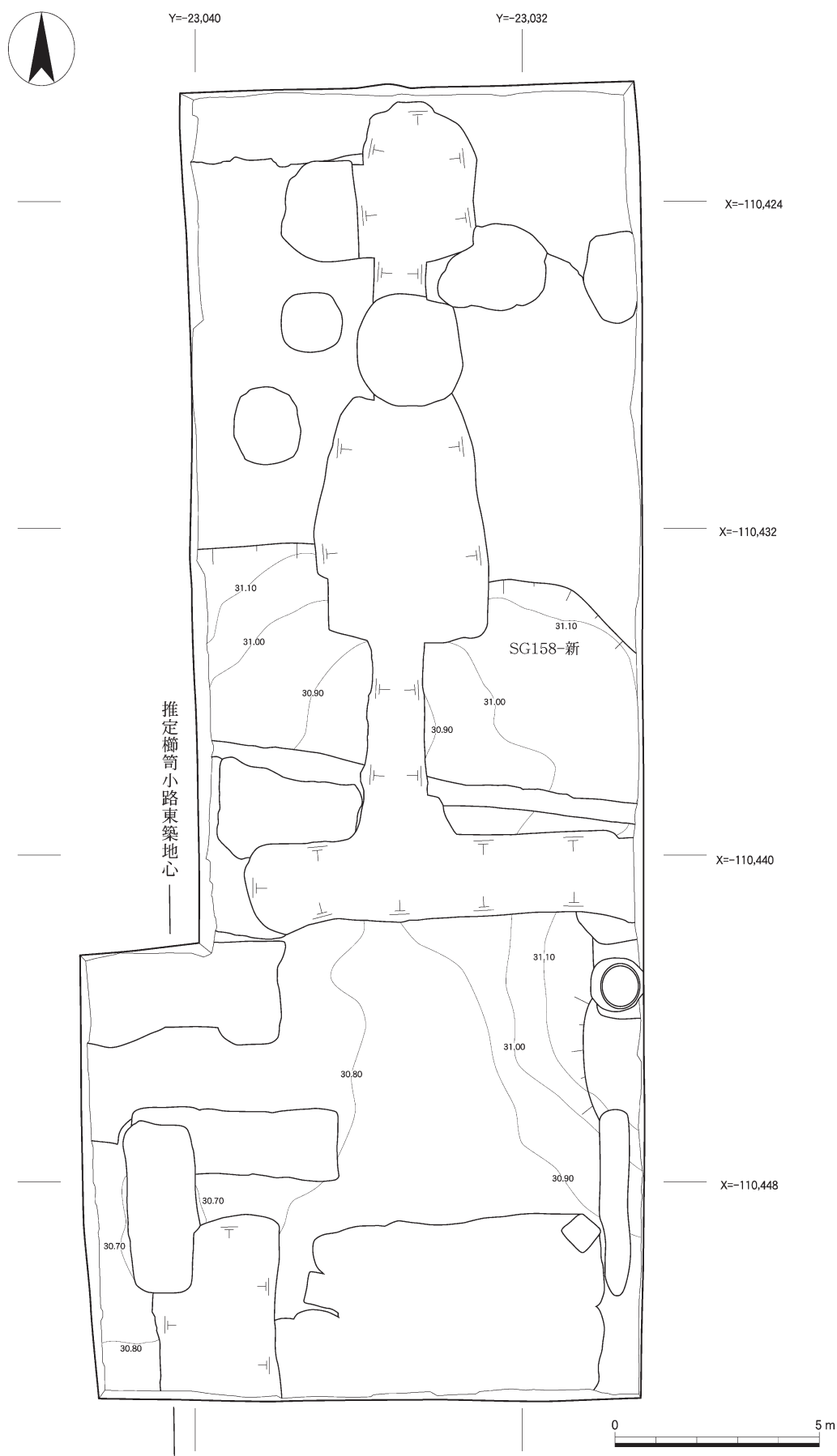


図8 第3-1面遺構平面図(1:150)

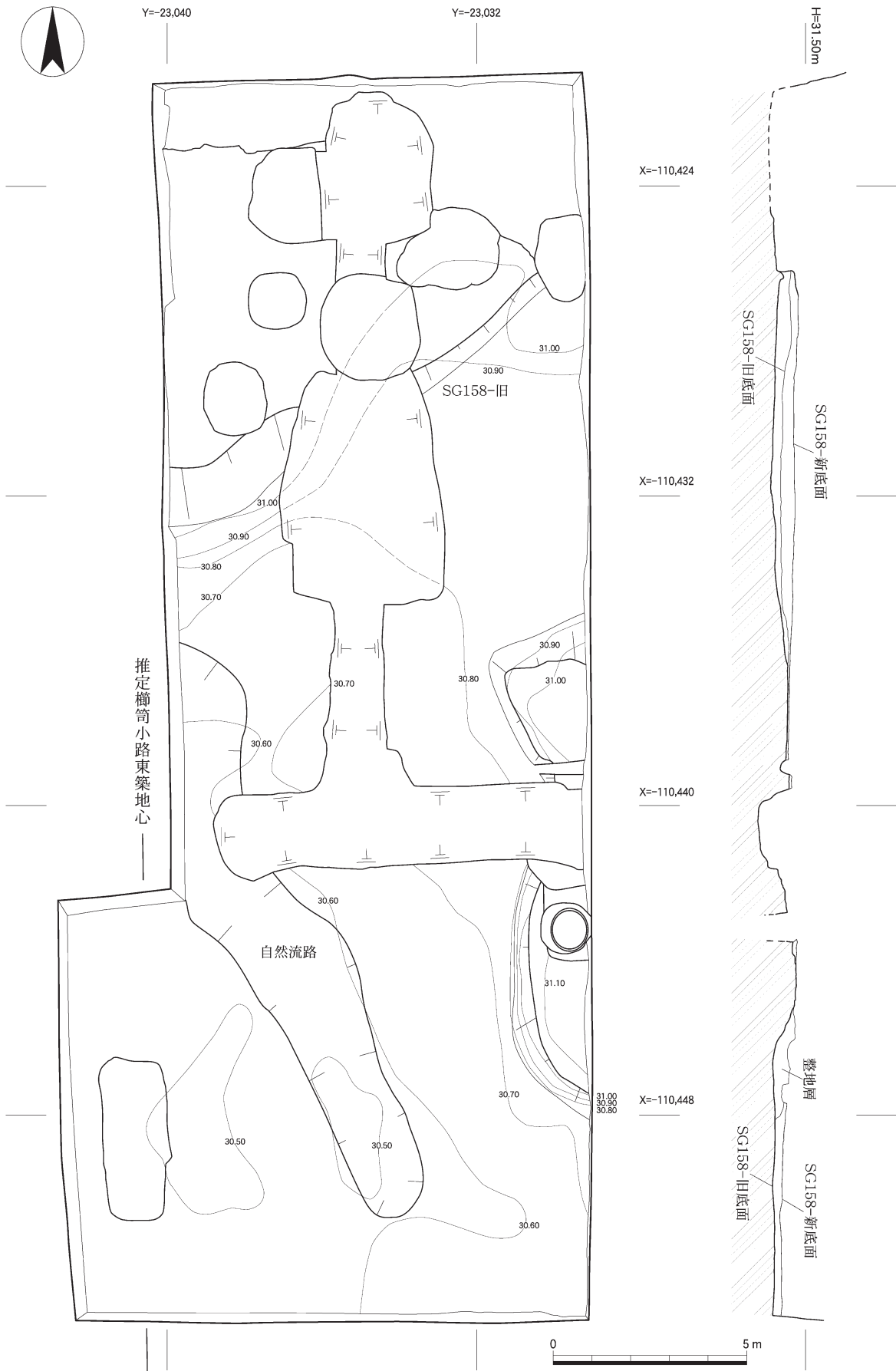


图9 第3-2面遺構実測図 (1:150)

6)。陸部の標高は 31.10 m、池底部の標高は最深部で 30.50 mある。9 世紀後半～ 10 世紀代の遺物が出土している。

なお、試掘調査で検出された、櫛笥小路東築地内溝に推定された遺構は、北北西から南南東に流れる自然流路であることが判明した。遺物は出土していない。

## 4. 遺物

遺物は整理箱に 54 箱出土している。遺物の時期は弥生時代・平安時代前期から江戸時代におよぶが、量的には平安時代後期に属するものが多い。

### (1) 土器類 (1～91) (図 10～13)

SE89 出土土器 (1～4) (図 10、図版 3) 井筒内からの出土土器は図示したものが全てである。中世の瓦が出土しており、それらと供伴する資料である。白色系土器の土師器皿小 (1・2) と皿大 (3) が出土している。輸入青磁壺 (4) は、口縁部を折り曲げて玉縁状口縁を作る。14 世紀中頃に位置付けられる。

SE107 出土土器 (5～20) (図 11、図版 3) 井筒内からは土師器、須恵器 (山茶碗を含む)、瓦器、輸入陶磁器が出土したが、9 割以上を土師器が占め、そのほとんどが皿である。皿は口径で 9.5 cm 前後 (5～10)、14.0 cm 前後 (11～13)、16 cm 前後 (14) の 3 群に分けられる。いずれも内面および口縁部外面をナデ、その他の外面はオサ

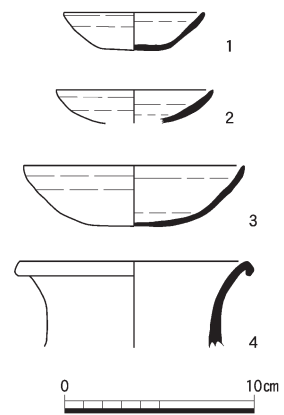


図 10 SE89 出土土器実測図 (1:4)

表 2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器				
平安時代前期～中期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、土製品、木製品		土師器18点、須恵器4点、緑釉陶器5点、灰釉陶器1点、黒色土器2点、瓦器1点、輸入陶磁器1点、軒瓦類27点、土製品1点、木製品8点		
平安時代後期	土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦		土師器11点、須恵器2点、瓦器1点、輸入陶磁器2点、軒瓦11点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、軒瓦		土師器3点、輸入陶磁器38点、軒瓦15点、土製品1点		
江戸時代	土師器、陶器、磁器、染付				
合計		60箱	152点 (11箱)	49箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より 6 箱多くなっている。

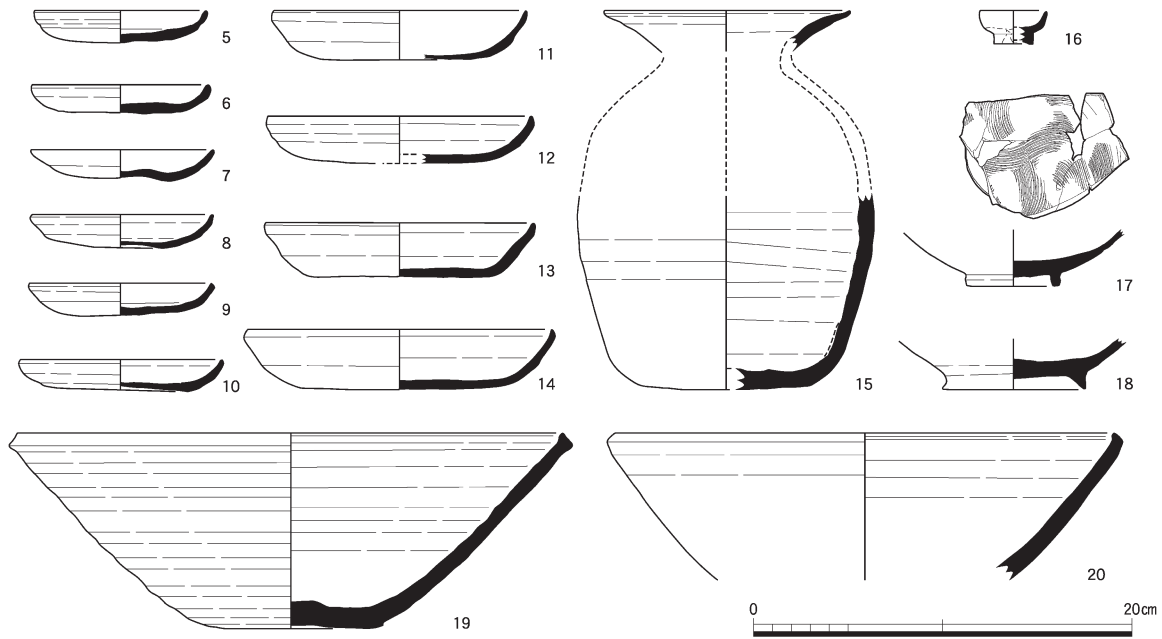


図 11 SE107 出土土器実測図（1：4）

エにより調整している。5・6は口縁部に煤が付着している。土師器壺（15）は、平らな底部に直立する体部をもち、口縁部は大きく外反する。図示していないが、2個体分出土している。須恵器には、山茶椀（18）・鉢（19）・甕がある。19は底部糸切りで、体部内面下半から底部は磨滅が著しい。東播系。瓦器には図示した鉢（20）以外に椀小片がある。20は須恵器を模した器形である。体部内面下半は磨滅している。輸入陶磁器には白磁ミニチュア椀（16）・白磁椀（17）がある。17は内面見込みに櫛描き文を有する。これらの土器群は12世紀前半から中頃に位置付けられる。

SG158 出土土器（21～50）（図 12、図版 3・4） 21～27はSG158- 新の埋土出土土器で、土師器・瓦器・輸入陶磁器がある。土師器皿（21～25）は口縁部が屈曲する形態（21・22）と外反する形態（23・24）がある。21・22は口縁部を内側へ折り返した部分の調整がかなり粗雑になっている。25は三足の皿である。瓦器椀（27）は、内面をヘラミガキ、口縁部内面に1条の沈線が巡る。外面には指頭による押圧痕の凹凸が残る。輸入陶磁器は図示した白磁輪花皿（26）のほか、口縁部が玉縁状に肥厚する白磁椀がある。他に小片であるが、白色土器皿・高杯がある。

28・29はSG158- 新の陸部出土土器である。土師器杯（28・29）・高杯などの器形があるが、小片が多く図示できるものはほとんどない。

30～46はSG158- 旧の埋土出土土器で、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。土師器は皿（30・31）・杯（32～34）・杯B（35）・高杯（36）・甕がある。杯・皿類の外表面は指オサエ・ナデ調整、高杯は皿部の破片で外面に放射状に削った痕跡を残している。須恵器は蓋（44）・杯・杯B・壺・甕（45）がある。蓋は内面に墨が付着しており、硯に転用している。甕は体部はタタキ、口縁部はヨコナデ。黒色土器は全てA類で、図示した椀（37・38）のほかに甕があるが、すべて小片である。37は外面ヘラケズリ、内面は粗いミガキ調整である。38は外面ヘラケズリ、内面は丁寧なミガキ調整で暗文を施す。底部には断面三角形の高台を付す。緑釉陶器には皿（39）・椀（40）

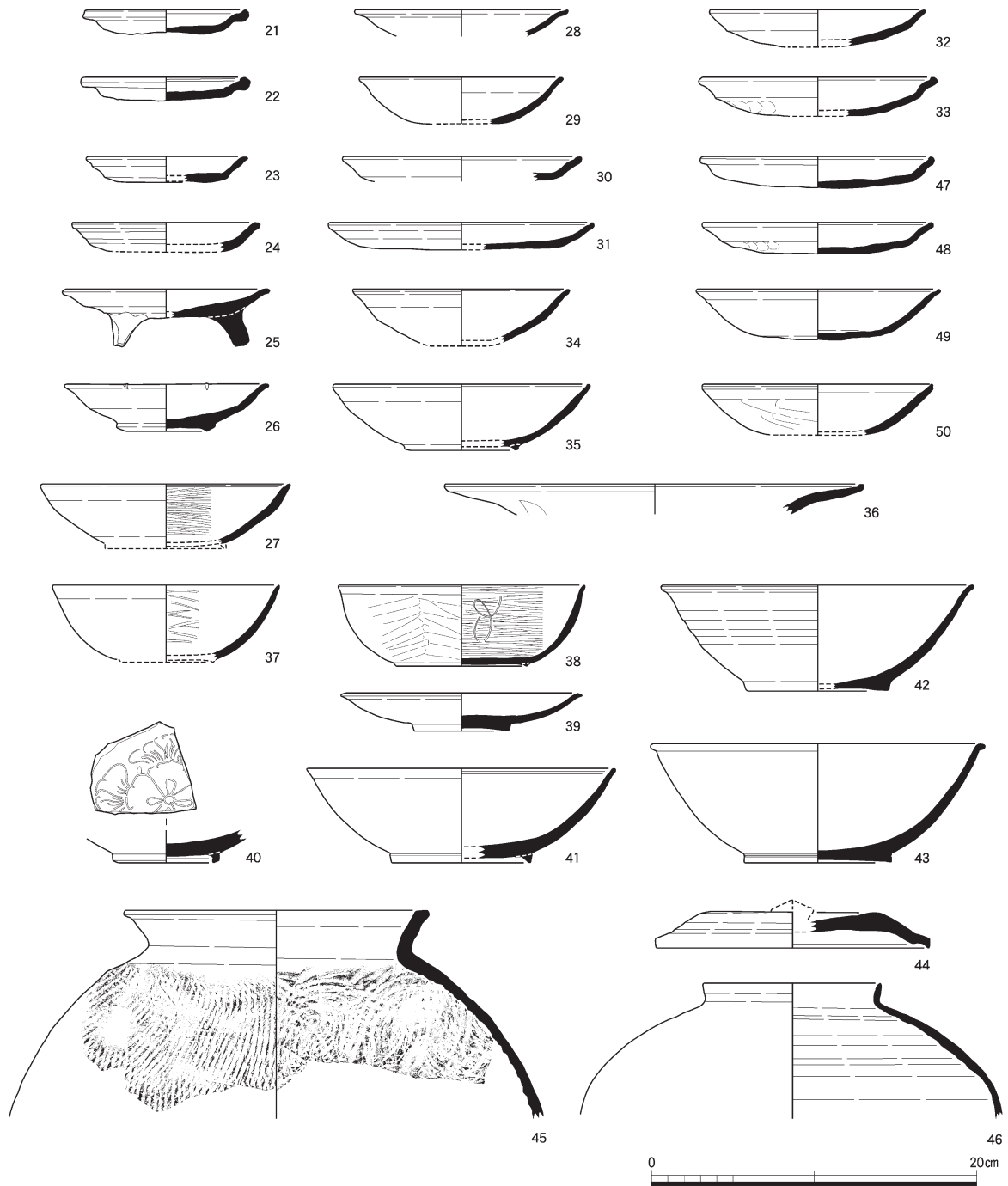


図 12 SG158 出土土器実測図

～43)・壺がある。皿は円盤状の高台で、全面ミガキ、全面施釉である。40は細い輪高台の付く底部の破片で、内面に陰刻花文を有する。高台は貼り付け。内・外面共にミガキを施し、全面に厚く施釉する。42は円盤状の高台を有し、全面施釉する。大型の椀が多い。46は灰釉陶器短頸壺で、灰白色の素地に口縁部内面から外面にかけて厚く釉がかかる。他に皿・椀類が出土しているが、いずれも小片である。

47～50はSG158-旧整地層から出土した土師器皿・杯類である。47～49は外面ナデ・オサエ調整、50はヘラケズリ調整である。

その他の遺構、整地層出土遺物（51～91）（図13、図版3・4）SG158上面の整地層などから輸入陶磁器が多量に出土したが、明確な遺構に伴って出土したものではない。12世紀後半から13世紀に位置付けられる器種・器形が良好な資料と認められるので掲載した（51～82）。51は青白磁合子蓋。側面および天井部に型押し文様が浮き出る。口縁下端と内面下段露胎。52は青白磁の小椀。53は青白磁の鉢。平底で体部外面の6箇所に縦沈線を施す。54・55は青白磁皿。平底の底部にやや内弯する体部をもつ。54は内面立ち上がりに段をもつ。55は内面体部・底部界

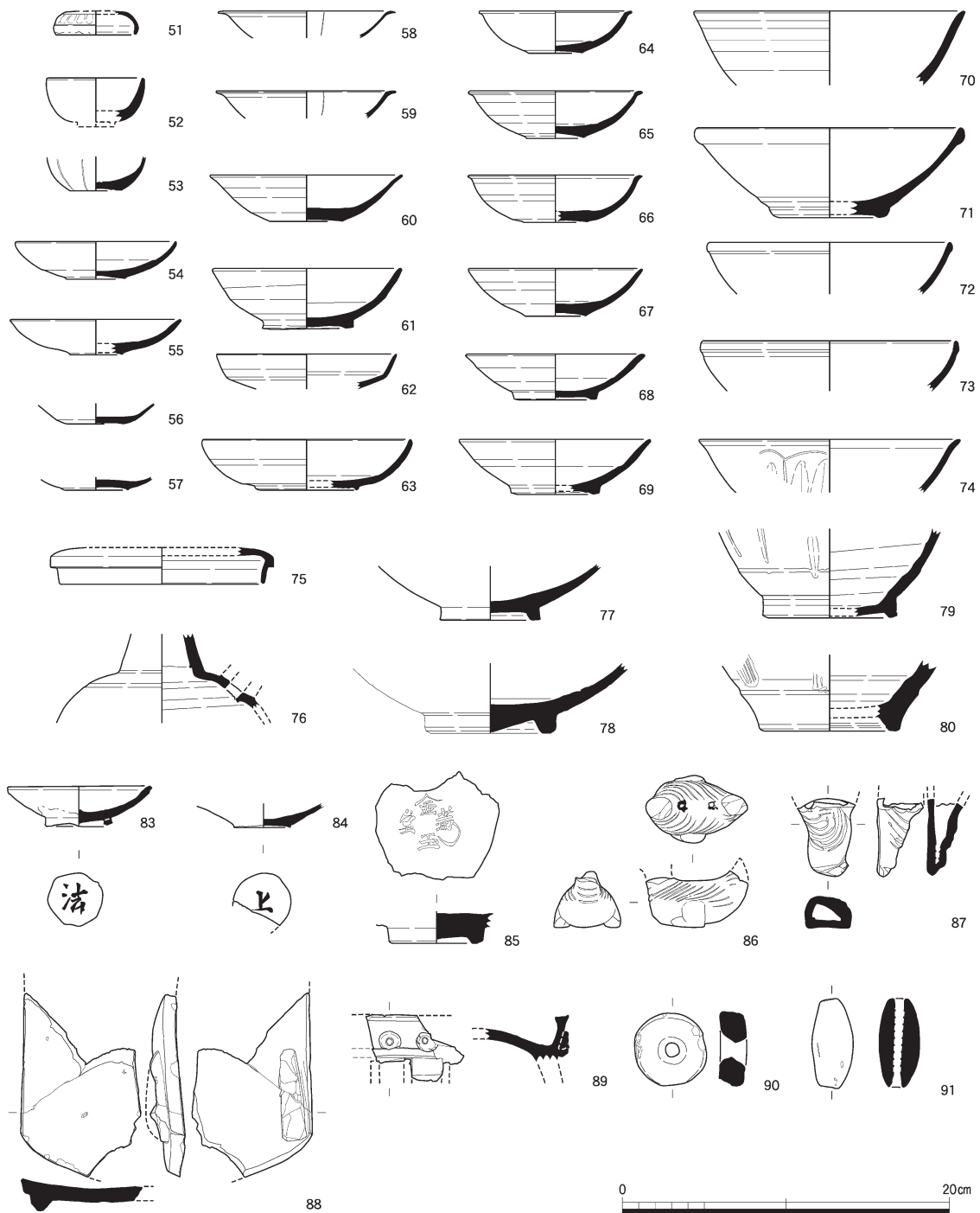


図13 その他の遺構、整地層出土遺物実測図（1：4）

に沈線が巡る。56・57 青白磁の体底部。体部は薄い。57 は底部がわずかに凹む。58・59 は青白磁皿で、口縁部は外反し、端面をもつ。内型作りで端部にわずかに切り込みを入れ、58 は淡褐色、59 は灰白色の釉を施す。60 は青白磁皿。平底で直線的に外上方へ延びる体部に、わずかに外反する口縁部をもつ。内面体底部界に沈線が巡る。61 は青白磁椀。内弯ぎみに外上方へ延びる口縁部に、削り出しの輪高台。体部下半から高台部は露胎。内面立ち上がりに段をもつ。62 は口縁部が屈曲して立ち上がる青白磁椀。63 は浅く細い削り出し輪高台に、内弯する体部をもつ青白磁椀。64～66 は平底で、体部は内弯し、口縁部は外反、端部は面をもつ白磁椀。内面体底部界に沈線が巡る。67 は平底で、内弯ぎみに立ち上がる口縁部で端部は丸くおさめる白磁皿。内面体底部界に沈線が巡る。68・69 は削り出し輪高台で、直線的に外上方へ延びる体部に、口縁部が外反ぎみに開く白磁皿。内面立ち上がりに段をもつ。70 はやや丸みをもって外上方へ延びる口縁部の青白磁椀。白色の緻密な胎土に白色の釉を施す。71 は白磁椀。内厚な玉縁口縁で体部下半は露胎である。72・73 は口縁部に小さな玉縁を有する白磁椀。74 は鎬蓮弁文の青磁椀。75 は青白磁の蓋。口縁部と内面は露胎。76 は青白磁の水注。灰白色の胎土に明緑灰色の釉を施す。77 は垂直に削り出された輪高台の白磁椀。体部下半へラケズリで露胎である。78 は大型の青磁椀。内面に櫛描き文とヘラ文を施す。底部内面を環状に釉を掻き取る。79・80 は白磁壺。79 は胴部を縦の筋で凹ませる。80 は櫛描きの縦線で区画する。81 は肩に耳をもつ白磁四耳壺。肩部は斜線文。胴部は櫛描きの縦線文を施す。82 は輸入陶器盤の破片か。

表3 その他の遺構、整地層出土掲載遺物一覧表

番号	種類	出土遺構	番号	種類	出土遺構
51	青白磁合子蓋	第1面上層	72	白磁椀	SK98
52	青白磁小椀	SK3	73	白磁椀	SK98
53	青白磁鉢	SK135	74	青磁椀	SK54下層
54	青白磁皿	SK128	75	青白磁蓋	SG158上面
55	青白磁皿	第1面上層	76	青白磁水注	2層・SK133・143・147
56	青白磁底部	SK128	77	白磁椀	2層
57	青白磁底部	SK135	78	青磁椀	SK82
58	青白磁皿	SK11	79	白磁壺	SK24
59	青白磁皿	第1面上層	80	白磁壺	第1面清掃
60	青白磁皿	SK98	81	白磁壺	SK129
61	青白磁椀	SK62	82	輸入陶器	SK129
62	青白磁椀	SK98	83	白磁皿	SD94
63	青白磁椀	第2層	84	白磁皿	SK54
64	白磁皿	SK66・73	85	青磁椀	第1面上層
65	白磁皿	SK149	86	白磁鳥形	第1面
66	白磁皿	SK144	87	白磁像物	第2面
67	白磁	SK144・63下層	88	須恵器風字硯	第1面・2層
68	白磁	SK99	89	須恵器門面硯	SK39下層
69	白磁	SK128	90	瓦質用途不明品	SK54
70	青白磁椀	SK75	91	土錘	あげ土(SG158?)
71	白磁椀	第1面上層			

83・84は白磁皿で、83は底部輪高台で4箇所を削り取る。底部外面に「法」の墨書がある。84は底部に「上」の墨書がある。14世紀。85は青磁椀底部。内面に「金玉満堂」のスタンプ文がある。龍泉窯。15世紀。86は鉄斑文の白磁鳥形品。体部にヘラ状工具で羽根を表現する。背中に鉄斑文。87は型作りの白磁の像物。

88・89は須恵器で、88は風字硯。硯面は平滑に磨滅する。底部はケズリ、脚は張り付け後、面取りをする。89は台付円面硯で外堤部の外面に竹管文を付した円形浮文を貼り付け、1条の突帯を巡らす。圈脚には0.4～0.6cmの長方形の透かし孔を開ける。12世紀前半～中頃の遺構から出土。混入品。90は用途不明の土製品である。平面は径4.5cm、厚さ約1.6cm、中央に約1.8cmの円孔を両面から穿つ。瓦質で側面を研磨する。91は土錘。全長5.5cm、径2.5cmで孔径0.5cm。灰白色を呈する。

## (2) 瓦類 (92～144) (図14～16、図版5～8)

軒瓦類は95点出土しているが、平安時代前期に属するものが多い。鎌倉時代に属する瓦類(92～106)は、SE89井筒内からまとめて出土した。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、ヘラ記号を有するものもある。平安時代に属する瓦類(107～144)は、SG158の埋土および上面の整地層などから出土しており、平安京以前の都城で使用されていた搬入瓦もある。

### 鎌倉時代の瓦類 (92～106) (図14、図版5)

複弁八葉蓮華文軒丸瓦(92) 外区に珠文12個を配する。瓦当部裏面上端に丸瓦を当てて接合。裏面オサエ。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦(93) 外区に珠文16個を配する。丸瓦凸面は縦位のハケ調整、裏面オサエ。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦(94) 外区に珠文16個を配する。裏面オサエ。

蓮華文軒丸瓦(95) 中房蓮子は1+4。裏面オサエ。

三巴文軒丸瓦(96) 右巻き。瓦当側面上位タテナデ。裏面オサエ。範は深い。

三巴文軒丸瓦(97) 右巻き。裏面指ナデ。

三巴文軒丸瓦(98) 右巻き。丸瓦凸面は縄タタキの後ナデ。範は深い。

三巴文軒丸瓦(99) 右巻き。丸瓦凸面は縄タタキ、裏面オサエ、丸瓦凹面はナデ。

剣頭文軒平瓦(100) 中央に右巻き二巴文。その両側に剣頭文を3個半ずつ配する。凹面は布目痕の後ナデ、瓦当端部横位はヘラケズリ、凸面は指オサエ。「×」のヘラ記号がある。

幾何学文軒平瓦(101) 中央に車輪文、その両側に剣頭文を4個ずつ配する。凹面は布目痕の後ナデ、瓦当端部横位はヘラケズリ、凸面はオサエ。

剣頭文軒平瓦(102) 剣頭文を8個配する。凹面は布目痕、瓦当端部横位はヘラケズリ、凸面はナデ。

剣頭文軒平瓦(103) 剣頭文を6個配する。凹面から瓦当面にかけて粗い布目痕、瓦当上端部横位はヘラケズリ、凸面はオサエ。「×」のヘラ記号がある。



剣頭文軒平瓦（104）凹面に布目痕、瓦当上端部横位はヘラケズリ、凸面はオサエ。  
 唐草文軒平瓦（105）凹面は細かい布目痕、瓦当上端部横位はヘラケズリ、凸面は指オサエ。  
 唐草文軒平瓦（106）凹面に布目痕、瓦当上端部横位はヘラケズリ、凸面はオサエ。  
 平安時代の瓦類（107～144）（図15・16、図版6～8）

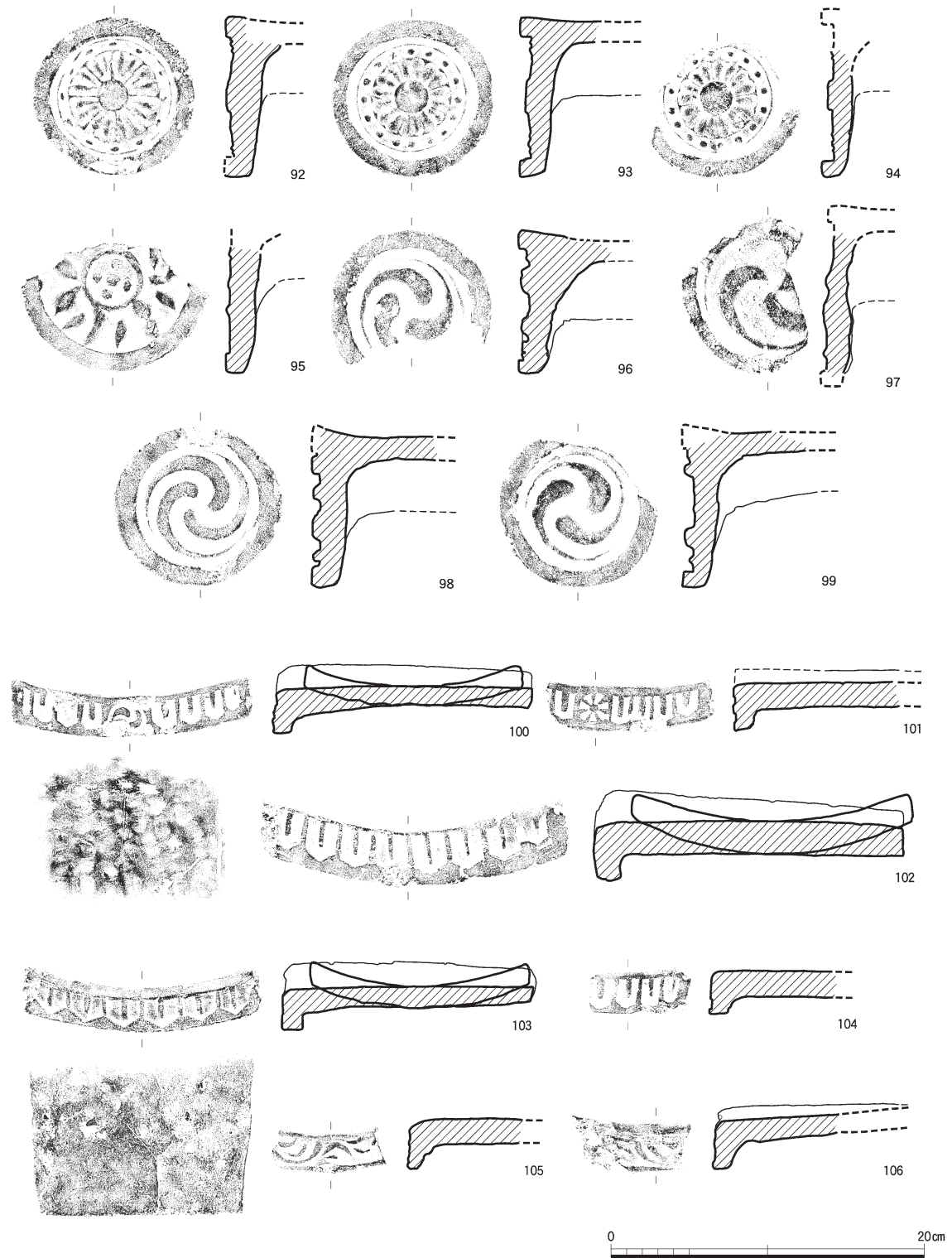


図14 SE89 出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

単弁蓮華文軒丸瓦（107）中房蓮子は1+6。外区に珠文を23個を配する。瓦当部側面はナデ、裏面オサエ。平安時代前期。芝本瓦窯産。

単弁蓮華文軒丸瓦（108）中房蓮子は1+5。外区内縁の珠文は15個である。裏面オサエ。平安時代前期。

複弁蓮華文軒丸瓦（109）丸瓦部凸面ケズリ、凹面布目後にナデ。平安時代前期。『平安京古瓦図録』（以下、『平古』とする）83と同系か。

単弁蓮華文軒丸瓦（110）界線は太い。平安時代前期。

重圏文軒丸瓦（111）圏線は断面三角形、瓦当部側面ケズリ。奈良時代。

複弁蓮華文軒丸瓦（112）子葉は盛り上がる。平安時代前期。『平古』78と同系か。

複弁蓮華文軒丸瓦（113）中房は平坦で圏線が巡る。蓮子は1+6。平安時代前期。

複弁蓮華文軒丸瓦（114）弁区と外区珠文帯とを分ける波状の界線。丸瓦凸面タテケズリ。平安時代前期。東寺系軒瓦。

複弁蓮華文軒丸瓦（115）中房は平坦で圏線が巡る。子葉は盛り上がる。平安時代前期。産地不明。

複弁蓮華文軒丸瓦（116）蓮弁は盛り上がる。弁間は先端が分かれる。平安時代前期。

複弁蓮華文軒丸瓦（117）蓮弁は盛り上がる。弁間は先端が分かれる。弁区と外区珠文帯とを分ける波状の界線。側面に範型痕。平安時代前期。東寺系軒瓦。

三巴文軒丸瓦（118）左巻き。巴文は頭は離れ、尾部は互いに接して圏線となる。外区に唐草状の凸線を追刻する。側面はナデ、丸瓦凸面タテケズリ、凹面は布目痕。平安時代後期。

巴文軒丸瓦（119）右巻き。外区に珠文を配する。裏面指オサエ。平安時代後期。

巴文軒丸瓦（120）左巻き。瓦当部凸面はタタキ、丸瓦部凸面布目の後、格子目裏面タタキ、凹面は布目痕。平安時代後期。

鬼瓦（121）右側牙付近の破片か。外区に珠文が巡る。平安時代前期。

鷗尾（122）胴部の側面の破片。縦帯部は凸帯2条を配し、間に珠文を配する。凸帯と珠文は貼り付け。珠文は円筒を押し付ける。外面はヘラケズリ、内面はナデ。

均整唐草文軒平瓦（123）曲線顎、瓦当部凹面ヨコケズリ、顎部凸面ナデ、平瓦部凹面布目痕、凸面タテケズリ。平安時代前期。『平古』369か。

均整唐草文軒平瓦（124）曲線顎、軟質。調整不明。奈良時代。平城宮6663C型式。

均整唐草文軒平瓦（125）中心飾りは上向きC字形で左右に分離し、中に竹管記号を付す。奈良時代。

均整唐草文軒平瓦（126）中央の方形区面に「大伴」銘を置く。曲線顎、瓦当部凹面ヨコケズリ、顎部凸面ナデ、平瓦部凹面布目痕、凸面タテケズリ、側面タテケズリ。平安時代前期、823年以前。宇治岡本遺跡。

均整唐草文軒平瓦（127）曲線顎、瓦当部凹面ヨコケズリ、顎部裏面タテケズリ、平瓦部凹面布目痕、側面タテケズリ。平安時代前期。東寺系軒瓦。

均整唐草文軒平瓦（128）曲線顎、瓦当部凹面タテナデ、顎部凸面ヨコナデ、平安時代前期。

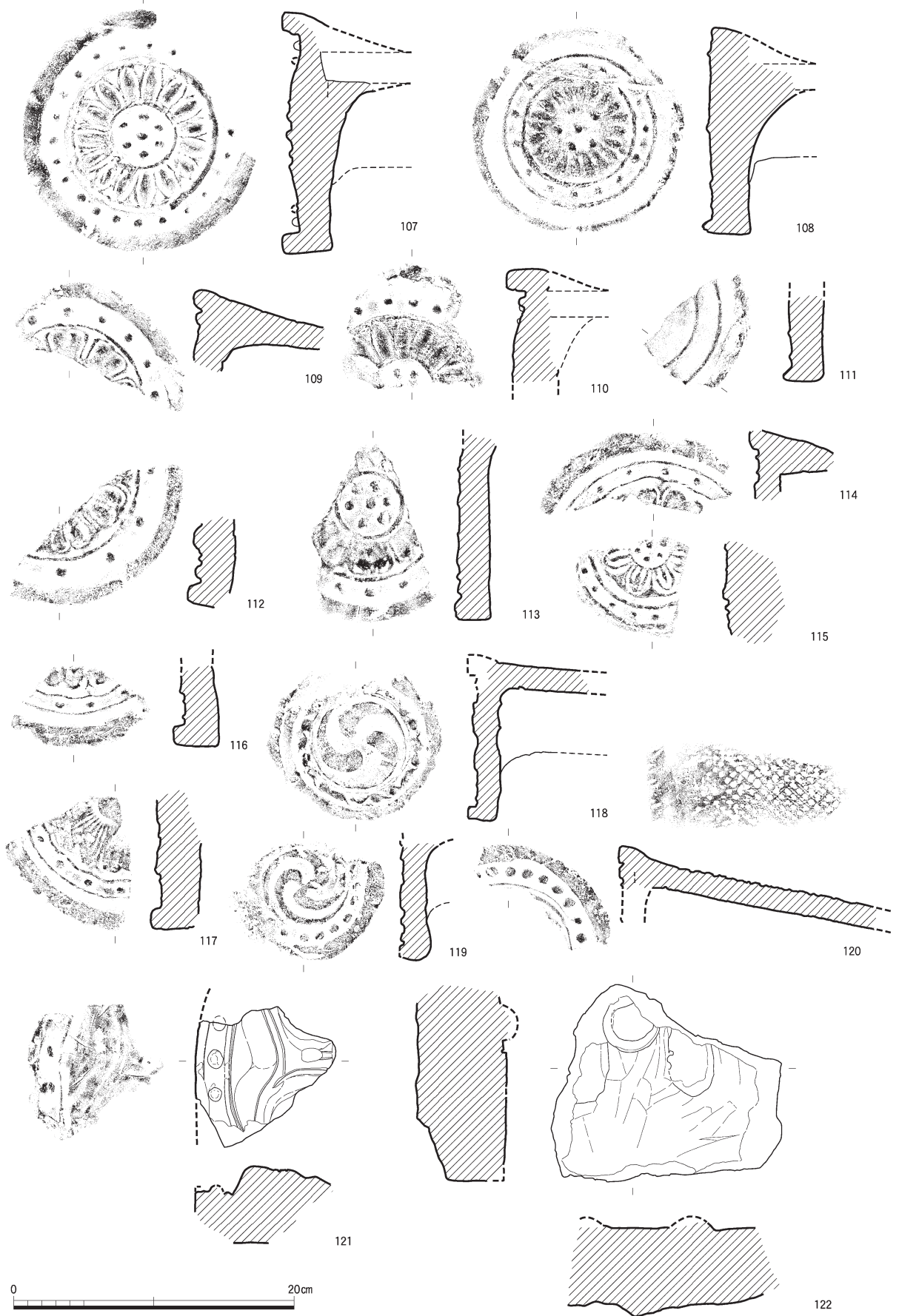


図 15 平安時代の軒丸瓦・鬼瓦・鴟尾拓影・実測図（1：4）

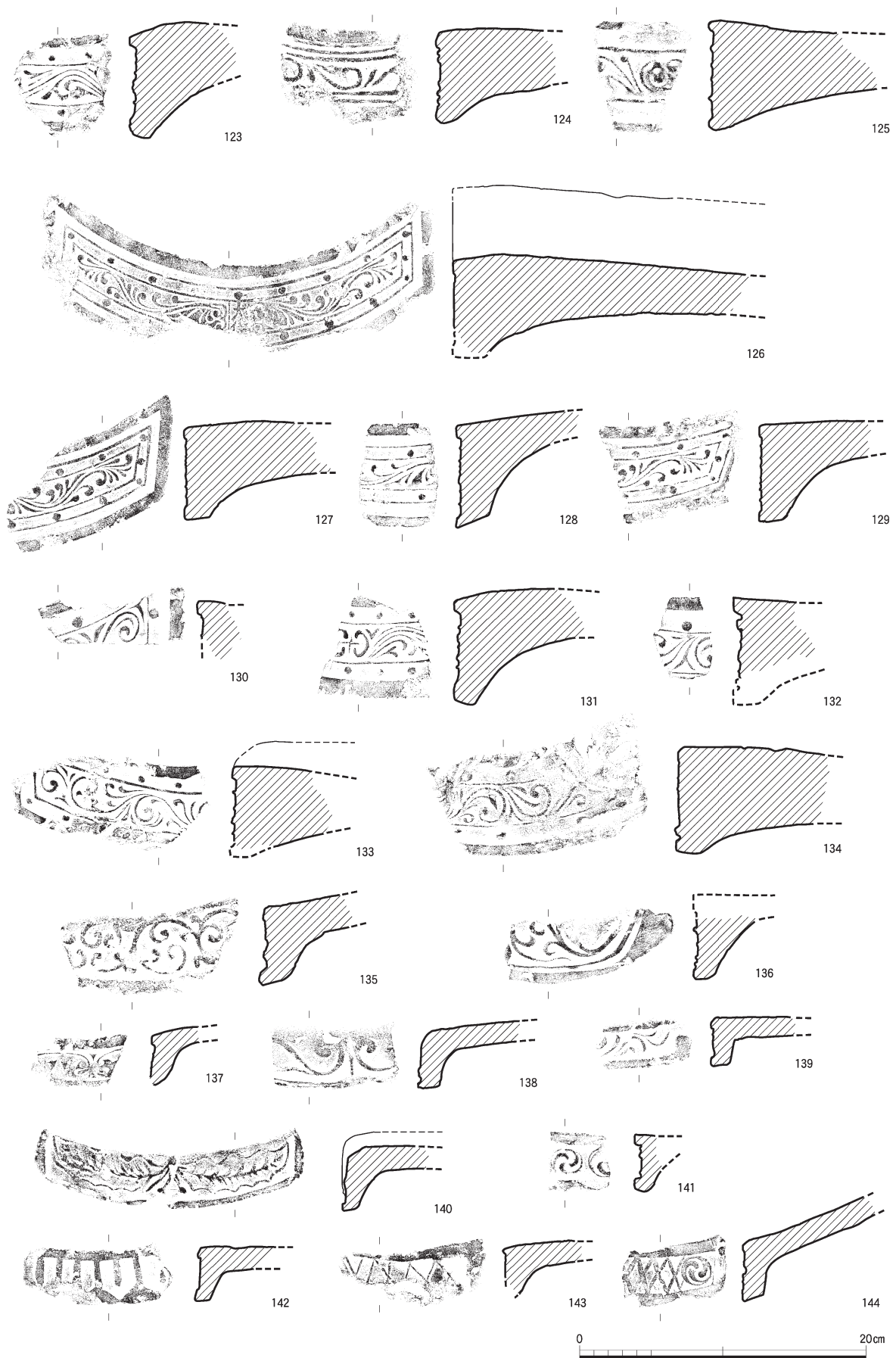


図16 平安時代の軒平瓦拓影・実測図（1：4）

東寺系軒瓦。

均整唐草文軒平瓦（129）曲線顎、瓦当部凹面ヨコナデ、顎部凸面ヨコナデ、顎部裏面タテナデ、平瓦部凹面布目痕、側面タテナデ。平安時代前期。『平古』341。東寺系軒瓦。

均整唐草文軒平瓦（130）瓦当部凹面ヨコナデ、側面タテケズリ、平安時代前期。

均整唐草文軒平瓦（131）中心飾りは上向きC字形で中心に「+」。曲線顎、瓦当部凹面ヨコケズリ、顎部凸面ヨコナデ、顎部裏面タテナデ、平瓦部凹面布目痕、平安時代前期。『平古』369。幡枝産。

均整唐草文軒平瓦（132）瓦当部凹面ヨコケズリ。平安時代前期。『平古』305。

均整唐草文軒平瓦（133）曲線顎、瓦当部凹面ヨコナデ、顎部凸面ヨコナデ、顎部裏面タテナデ、平瓦部凹面布目痕、ヨコナデ、側面タテナデ。平安時代前期。『平古』308・309・310に近似。芝本瓦窯産。

均整唐草文軒平瓦（134）曲線顎、瓦当部凹面ヨコナデ、顎部凸面ヨコナデ、顎部裏面タテナデ、平瓦部凹面布目痕、側面タテナデ。132と同系か。平安時代前期。『平古』305。

唐草文軒平瓦（135）半折り曲げ。瓦当部凹面布目痕、顎部凸面ヨコケズリ。平安時代中期末から後期初頭。

唐草文軒平瓦（136）半折り曲げ。表面黒灰色、胎土は灰白色でやや軟質。平安時代中期末から後期初頭。幡枝窯産。

唐草文軒平瓦（137）瓦当部凹面布目痕、裏面指オサエ、側面ケズリ。灰白色。平安時代後期。幡枝窯産。

唐草文軒平瓦（138）瓦当部凹面布目痕、胎土は長石多く含み浅黄色。『平古』469・470と同系。

唐草文軒平瓦（139）瓦当部凹面布目痕、胎土は粒子やや粗く灰白色。平安時代後期。

唐草文軒平瓦（140）瓦当部凹面ヨコミガキ、瓦当部裏面ナデ、平瓦部凹面布目痕、平安時代後期。

三巴文軒平瓦（141）右巻き。瓦当部裏面ヨコナデ、胎土は粒子やや粗く橙色。平安時代後期。播磨産。

剣頭文軒平瓦（142）瓦当部裏面ナデ、平瓦部凹面布目痕、表面は黒灰色、胎土は粒子細かく灰色。平安時代末期。

格子文軒平瓦（143）瓦当部凹面布目の後タタキ、裏面オサエ、灰白色。平安時代後期。

幾何学文軒平瓦（144）中央に格子文、端に右巻き三巴文を配する。巴文は頭部は離れ、尾部は互いに接して、圏線となる。瓦当部凹面ヨコケズリ、平瓦部凹面布目痕、凸面ナデ。ヘラ記号あり。平安時代後期。幡枝窯産。

### (3) 木製品 (図 17)

木製品はすべて SG158 から出土した。

斎串 (145) 圭頭部破片。側面に削りかけを施す。材はヒノキ。柾目。

刀子形 (146) 細板の片側を削って刀身と柄をあらわす。全体に粗雑な作りである。材はスギ。板目。

蓋板か (147) 中央部分が炭化している。材はスギ。板目。

曲物底板 (148) 側面に 3 箇所をとめる木釘、表面に刃物痕が付く。材はヒノキ。柾目。

曲物底板 (149) 直径 33.5 cm 以上、厚さ 0.7 cm。側面に木釘孔がある。材はヒノキ。板目。

杓子柄 (150) 杓子柄の断片。割り材を扁平な細棒状に加工したもので、柄の先端をとがらし、曲物の身の側板内側にあたる部分に釘孔をあける。材はスギ。板目。

木槌 (151) 組み合わせ式の木槌。頭は円筒形を呈し、一側面の中央に 2.9 cm × 1.8 cm の長方形の孔を貫通させ、柄を挿入する。柄は切断されている。頭の木口面の一方に打撃痕跡が残っている。頭長 13.0 cm、直径 6.4 cm。材は頭はアカガシ亜属、柄はアカガシ亜属。

草鞋 (152) 芯縄を伸ばしたヒモがみられないが、台の尾端に踵を受けるカエシの基部が認められる。残存長 16.7 cm、残存幅 7.0 cm。

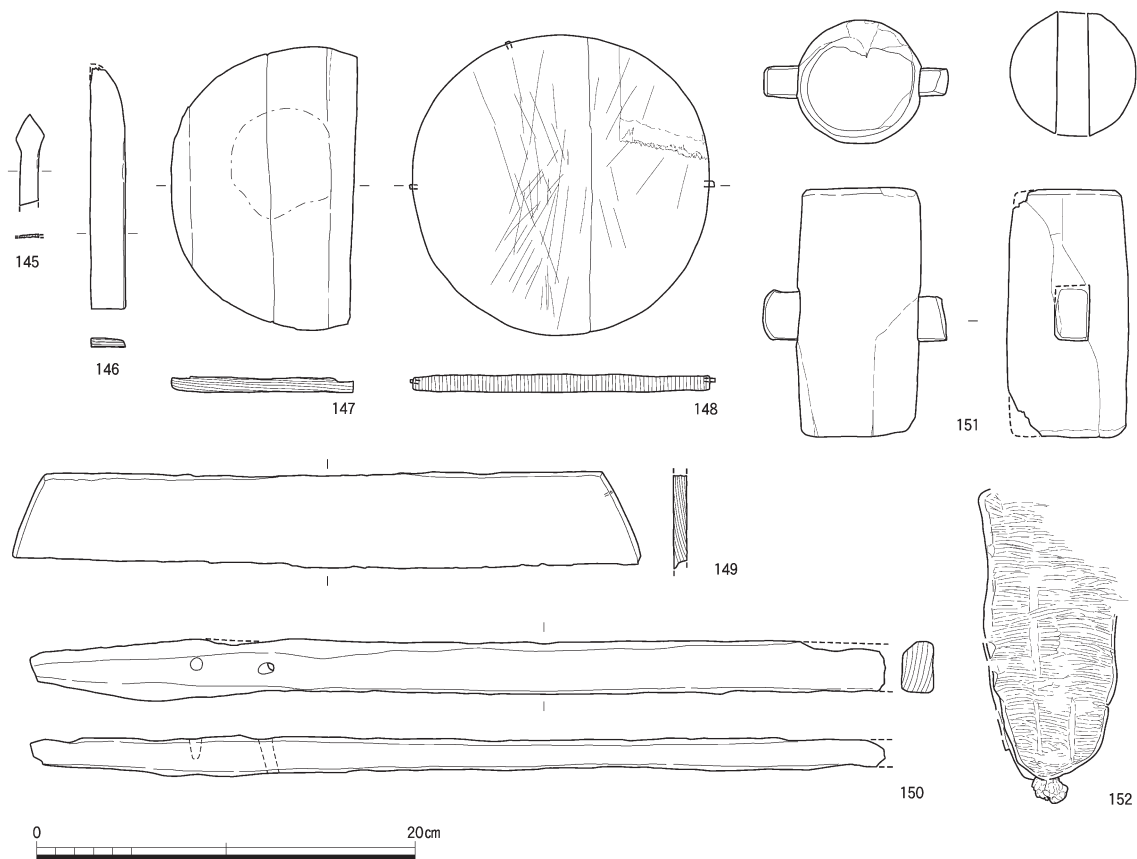


図 17 木製品実測図・草鞋模式図 (1 : 4)

## 5. ま と め

今回の調査では、平安時代の池状遺構を検出した。池状遺構は、二時期の変遷が確認され、9世紀中頃に成立し、10世紀後半から11世紀初めにかけて規模を縮小して造り直され、11世紀末期に埋まったことが明らかになった。池内堆積土からは草木17科22種の種実を検出した(表4)。試料採取地および周辺は、タデ科・ヒシ科・ミズアオイ科や抽水植物のミズアオイなど水辺の植物が生育し、周辺部のやや乾燥した地にはナデシコ科・セリ科などが生育していたと考えられる。池状遺構は調査区内の南4分の3ほどに全面に広がっている。調査区の西には、櫛笥小路東築地や路面が推定されている。しかし、池状遺構は推定位置より、西側に広がっていることが確認され、櫛笥小路関連遺構は、検出していない。調査地では、奈良時代の搬入瓦や平安時代前期から中期の軒瓦などが50点ほど出土している。平安時代前期から中期には、1町以上の邸宅が存在していた可能性がある。

今回の調査では、池状遺構のみの検出にとどまったが、これに伴う建物跡などは、北東部に位置するものと考えられる。

### 1) 『史料京都の歴史 第9巻 中京区』京都市 1985年

表4 SG158 検出種実等一覧表

#### SG158底部

和名	部位	科名	和名	部位	科名
タデ科	果実	タデ科	ヒシ科	果実	ヒシ科
ミズユキノシタ	種子	アカバナ科	チドメグサ属	果実	セリ科
ヘラオモダカ	果実	オモダカ科	オニルリソウ?	果実	ムラサキ科

#### SG158-旧

和名	部位	科名	和名	部位	科名
タデ科1	果実	タデ科	ヘラオモダカ	果実	オモダカ科
タデ科2	果実	タデ科	ヒシ科	果実	ヒシ科
タデ科3	果実	タデ科	チドメグサ属	果実	セリ科
アカザ属	種子	アカザ科	タガラシ	部位	キンボウゲ科
オニルリソウ?	果実	ムラサキ科	タカサブロウ	果実	キク科
ミズユキノシタ	種子	アカバナ科	シソ科	果実	シソ科
ミズアオイ	種子	ミズアオイ科	エノコログサ属	果実	イネ科
マツモ	果実	マツモ科	イボクサ	種子	ツククサ科
マタタビ属?	種子	サルナシ科			

#### SG158-新

和名	部位	科名	和名	部位	科名
ザクロソウ	種子	ナデシコ科	ミズアオイ	種子	ミズアオイ科
ツメクサ	種子	ナデシコ科	ヘラオモダカ	果実	オモダカ科
ミドリハコベ	種子	ナデシコ科	カヤツリグサ属	果実	カヤツリグサ科

※ 池内の上層・下層・底部からそれぞれ10ずつの試料を採取して0.5mmの篩で水洗いし、残渣から植物種実を拾い出して同定した。





# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょういちぼうじゅうさんちょうあと							
書名	平安京左京四条一坊十三町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-10							
編著者名	伊藤 潔・近藤章子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 しじょういちぼう 四条一坊 じゅうさんちょうあと 十三町跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 みぶほうじょうちょう 壬生坊城町5 -15他	26100		35度 00分 15秒	135度 44分 51秒	2006年7月 3日～2006 年8月29日	385m <sup>2</sup>	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 四条一坊 十三町跡	都城跡	弥生時代		弥生土器				
		平安時代前期 ～中期	池(新・旧)	土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、黒色 土器、瓦器、輸入陶磁 器、瓦、土製品、木製 品				
		平安時代後期	井戸	土師器、須恵器、瓦器、 輸入陶磁器、瓦				
		中世	井戸、溝、土壇な ど	土師器、須恵器、瓦器、 瓦質土器、焼締陶器、 施釉陶器、輸入陶磁器、 軒瓦				
		近世	土壇など	土師器、陶器、磁器、 染付				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-10  
平安京左京四条一坊十三町跡

発行日 2006年10月31日  
編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>  
印刷 三星商事印刷株式会社  
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961